

☆☆図書委員会より☆☆

☆☆お知らせ☆☆ ☆第8号☆

2013年 1月～ 2月（前期） 新規登録の書籍をご案内します



書名(ご寄贈書)	著者名	出版社	分類シール
希望のみなもと —わたしを支えた聖書のことば	船本弘毅 編	燦葉出版社	[青 194 Fu]
☆☆ 船本弘毅先生ご編集、大村栄先生をはじめ阿佐ヶ谷教会会員他信仰者の方々の「魂の証」(「はじめに」より)です。			
図説『新約聖書』がよくわかる！ パウロの言葉 青春新書 INTELLIGENCE	船本弘毅 監修	青春出版社	[橙 193.5 Fu]
図説地図とあらすじでわかる！ 聖書 青春新書 INTELLIGENCE	船本弘毅 監修	青春出版社	[橙 193 Fu]
図説地図とあらすじでわかる！ イエス 青春新書 INTELLIGENCE	船本弘毅 監修	青春出版社	[赤 182.8 Fu]

☆☆ いづれも船本弘毅先生ご執筆の、地図やイラストが楽しい、ハンディな新書本です。

(裏面へつづく…)

おすすめ本のご紹介…

中野 実 牧師より

『これだけは知っておきたい 史的イエス』

J.H. チャールズワース 著 中野 実 訳

これはわたしが翻訳し、昨年夏出版された本です。読売新聞の書評欄でも取り上げられました。しかし皆さんの多くにとっては「史的イエスって何？」という感じでしょう。「史的イエス」とは、歴史学者によって再構成された限りにおけるナザレのイエス像のことです。近代以降、史的イエス像探求という問題意識が生まれ、神学においては難しい応用問題の一つとなっています。

私たちにとって信仰の対象であるイエス様を、歴史学のまな板にのせてしまうことに抵抗を感じる信仰者も多いと思います。たしかにイエス様は全世界の救い主として今も生きて働いておられる方です。しかしイエス様が実現してくださった救いは、私たちの心の中における出来事に留まりません。悲しみ、苦しみ、矛盾に満ちた歴史のただ中で起こり、その歴史を根底から削り変えるスケールの大きな救いです。その救いを実現するために、すでにイエス様はこの矛盾だらけの歴史を（2000年前のパレスチナのユダヤ人として）歩んでくださったのです。そういう意味で、歴史において歩まれたイエス様への関心を深める事は、信仰的に言っても健全なことではないでしょうか。どうぞ、関心を持たれた方は是非読んでみてください。

☆☆ 『これだけは知っておきたい 史的イエス』は前回第7号で寄贈書として紹介済みです。

☆☆ 阿佐ヶ谷教会図書室の蔵書、購入・寄贈希望書のお勧め文や鑑賞文を募集しております。これは適宜本誌「☆図書委員会よりお知らせ☆」に掲載させていただきます。誌面の都合上、恐縮ですが選考させていただきます。

キリスト教とユダヤ教

キリスト教信仰のユダヤ的ルーツ

F.クリュゼマン
U.タイスマン 編 教文館 [赤 190 Cr]
大住雄一 訳

☆☆ 本誌第7号にて教職推薦の本です。

キリスト教カウンセリング講座ブックレット 12

ミドルエイジの問題 家族療法の視点から

石井千賀子 著 キリスト [茶 197 I]
加藤麻由美 著 新聞社

鑑賞して… (教会員の鑑賞文より)

『クリスマスの思い出』

トルーマン・カポーティ / 村上春樹訳 / 山本容子銅版画 文藝春秋

…年末近く、朝日新聞12月7日の別刷り「be Extra, Books」でカポーティ作の『クリスマスの思い出』の若い書店員さんの紹介記事にとてもひかれた。…早速その本を新宿で買って、帰りに電車の中で読んだ。……アメリカの辺鄙な農村、森のささやき、牧草の香り、牛の匂い、小川のせせらぎ、お日様の輝きを懐かしく感じさせられた。そこで彼らは年に一度、クリスマス前に31個のフルーツケーキを焼き気に入った人たちに配る。第一にローズヴェルト大統領に送る、牧師のルーシー夫妻などなど…。そして森に行きクリスマスツリーを切ってくる。そんな「詩」の様な物語である。…本の帯に「イノセント・ストーリー」とある。正にイノセントな人たちだ。人を信じる。疑わない。憎むなんてことは全く知らない。人が世界が神様の御心から出来ている。そして自分もそれによって存在し生きていと生活する。…アメリカの人の素朴な信仰をふと見る気がした。…(図書委員 m)

…書林礼賛 しょりんらいさん

『近代日本文学とキリスト教』

笹淵 友一 著 1952, (基督教文庫3), ナツメ社

キリスト教書籍とはなんだろうか？ 著者や登場人物がクリスチャンだったり、篤い信仰心を吐露した書物を指す場合が多い印象があるが、そればかりが必須条件ではないだろう。本書はまず、西欧近代文学のなんたるかを考察する。文学がキリスト教への懐疑や神の否定をあらわしていたとしても、それは逆説的に「根底的にキリスト教によって規定されて」いると解き明かした。近代日本文学は、このような西欧近代文学に触発されて古典の伝統の中から生まれたのだ。福沢諭吉、坪内逍遙、島崎藤村、北村透谷、森鷗外、幸田露伴、国木田独步、北原白秋等々の諸作品が、いかにキリスト教の影響を受けてきたかを明瞭に考察しており、一見、キリスト教と関連しないような作品についても作家とキリスト教との“内面的な深い交渉”を見出している。本書は日本文学論としては普遍的な論考なのだが、笹淵の筆致の鮮やかさは目からうろこである。作者、ささぶちともいち、1902年熊本県生まれ、国文学者。『日本近代文学大事典』によると「穏健にして重厚な分析批評」とある。本書は平易して簡潔、論理的でわかりやすい文体であるが、旧字体のため読みにくく、慣れないと字引と首っ引きであるのが難点か。(M.I.)